シェリーの “Mont Blanc” と ヘレン・マライア・ウィリアムズ

田久保　浩

Shelley’s “Mont Blanc” and Helen Maria Williams

TAKUBO Hiroshi

言語文化研究　徳島大学総合科学部
ISSN 2433-345X
第 29 巻　別刷　2021 年 12 月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*
The Faculty of Integrated Arts and Sciences
Tokushima University
Volume XXIX, December 2021

シェリーの “Mont Blanc” と ヘレン・マライア・ウィリアムズ

田久保　浩

Shelley’s “Mont Blanc” and Helen Maria Williams

TAKUBO Hiroshi

Abstract

Helen Maria Williams is best known for her witness account of the French Revolution with her eight volumes of Letters from France (1790-1796), which was widely read and used by many writers who referred to the events and the lives of people in France during the turbulent years of the Revolution, including Wordsworth, Hazlitt, and Carlyle. It is certain that Percy Bysshe Shelley, who was born a generation later read her books of prose and poetry. The center of attention in this study is two travel books to Switzerland: *A tour in Switzerland* published by Williams in 1798 and *History of a Six Weeks' Tou*r written by Mary and Percy Shelley and published in 1817. Each contains accounts of the landscape and people of the region, and each contains a poem describing Alpine mountains. Shelley’s poem, “Mont Blanc,” is the better known of the two and has been a focus of critical attention by hundreds of books and articles. An examination of the writings of the two writers side by side will bring out the affinity in language and thought

between the two writers and help understanding Shelley's controversial poem as well. That affinity means how familiar Williams and other writers of 1790s were to Shelley. It also supports the view that British Romantic literature had its origin in the ideas of the progressive intellectuals of 1780s and 90s who welcomed the French Revolution. This paper attempts to support that hypothesis by illustrating the affinity in the poetic language and the ideas on the nature of imagination found in Williams's *A Tour* and Shelley's famous poem. The two writer's poems share a characteristic attitude in the observation of nature. It is to look at nature with all its details but to leave what is incomprehensive as it is. The affinity thus brought out sheds light on the enigmatic ending of Shelley's "Mont Blanc."

1814 年 7 月 28 日、シェリーは、メアリー・ゴドウィンと駆け落ちし、フランスへと向かう。メアリーの義理の妹クレア・クレアモントも一緒であった。6 日後、８月２日、一行はパリに到着する。シェリーらは、懐中時計を売るなど金策に苦労していた。８月５日、ヘレン・マライア・ウィリアムズ宅を探しに、パリを尋ね歩く。翌日金融業者のタヴァルニエから住所を聞き出し、尋ねてみるが地方に出ていていつ帰るかわからないとのことだった。シェリーらが住所を知らなかったことから、紹介状やその他のつてはなく、パリ在住者で思いついた一人であったと考えられる。メアリー・シェリーの日記には、ウィリアムズに「我々の経歴や境遇を話せば間違いなく関心を持ってくれるだろう」というコメントが記されている（8-10）。こうした記述からシェリーらがウィリアムズのことを知っており、親近感を抱いていたことは確かであるが、それ以上の関係はうかがえない。ウィリアムズはメアリーの母でありシェリーの尊敬するメアリー・ウォルストンクラフトにとって、1792 年パリで人脈を築くのを助けてくれ、フランス革命を共に支持する盟友であった。メアリーの父、ゴドウィンもかつて彼女のサロンに顔を出して顔見知りであった。また、ワーズワース、ハズリット、カーライルらがフランス革命を記述するのに援用した同時代の現地からの貴重な記録『フランスからの手紙』(*Letters from France*)の著者として有名であった。

本稿では、当時の有名な女性作家、ヘレン・マライア・ウィリアムズ（Helen Maria Williams, 1759-1827）について、シェリーの「モンブラン」（"Mont Blanc"）に焦点を当てて、二人の詩人として、そして思想的な親近性について探ってゆきたい。特に、ウィリアムズの 1798 年刊行の旅行記『スイスの旅』(*A Tour in*

Switzerland) 中の詩、“Hymn Written among the Alps,”および 1786 年詩集中の “An Epistle to Dr. Moore”らの詩と比較してみる。ウィリアムズの詩は、韻律においてシェリーの 10 詩脚詩とは異なっており、直接のエコーがあるとまでは言えない。しかし両者のあいだには言葉と思想における親近性があり、間接的なものにせよ、そこに見られるエコーについて、検証する価値があるだろう。また、ウィリアムズは、『スイスの旅』第２巻に付録として、ド・カルボニエール（1755-1827）のアルプス氷河形成についての論文を彼女自らの英訳によって収録している。この文章は、ワーズワースやバイロンも自著で参考にしていたことが確認されているが、イギリス・ロマン派の想像力論の観点からシェリーの詩を論じるうえで興味深い（Cian Duffy 27)。“Mont Blanc”においては、コールリッジの “Hymn before Sun-rise”あるいは “Kubra Khan”およびワーズワースの “Tintern Abbey” らの詩の影響が論じられているが、これまでウィリアムズの詩との関係についての分析的論考はない。ウィリアムズのテクストとシェリーの詩との関係を分析することで、シェリーが関心をもっていた 1790 年代の作家の一人として、ウィリアムズとシェリーとの間の思想や著作における興味深い親近性が見えてくる。

ワーズワースにとってのウィリアムズの重要性は近年、さまざまな研究で明らかになってきている。[1] ウィリアム・ゴドウィンの『政治的正義』やロバート・サウジーの『ワット・タイラー』など、1790 年代のラジカルな書籍に親しんでいたシェリーにとっても『フランスからの手紙』の著者ヘレン・ウィリアムズの名になじみがあったのは間違いない。またシェリーはイートン校時代に、のちの人気作家フェリシア・ヘマンズと文通をしたり、シャーロット・デイカーのゴシック小説を愛読するなどしていたことから、1790 年代に人気のあったウィリアムズ、シャーロット・スミス、メアリー・ロビンソンら女性作家に親しんでいた可能性は大きい。これらの作家はすべて交友関係においてゴドウィンとつながる存在でもある。

『スイスの旅』(*A Tour in Switzerland*)は、1794 年、前年ロベスピエールの権力の下、前年に投獄にあったウィリアムズが一時避難の目的でスイス、バーゼルに半年ほど身を寄せた時の経験をもとに語った旅行記である。ロベスピエール

---

[1] Richard Gravil は、両者の関係、およびウィリアムズのワーズワースへの影響の主題に焦点を当てて詳しく論じている。ウィリアムズについては、Kennedy, Jones, Johnston らが1790 年代の社会的背景との関係に焦点を当てて論じている。

の失脚後フランスに戻り、書きあげ、1798 年に二巻本として出版している。文体においてみると、スイスの歴史、風土、社会への考察を織り交ぜたこの紀行文は、メアリー・シェリーの軽妙なスタイルで若者たちの旅の感想として書かれた『6 週間旅行記』(*History of Six Weeks' Tour*)とは大きく異なる。しかし自由の国としてのスイスの神話を覆そうとする記述において、両者は似ている面をもっている。クリス・ジョーンズはウィリアムズがスイスの社会について紹介するにあたって「フランス革命の政治的および道徳的な本来の理想を隠そうとしていない」と指摘している (152)。特にウィリアムズがバーゼルにおける金銭崇拝を皮肉をもって描写するところなど、その指摘を裏付ける。

> バーゼルに数週間も滞在すると、人々の性格や習慣について、幻滅を感じざるを得なくなった。私はしばしば現地の社交会で人々と交わる機会を得たが、ここの人々には芸術や文学、自由や地上で得られる善への愛は、まったく感じられず、すべては金の話であった。ルイ紙幣と革命通貨の話ばっかりで、もし窓の外を流れる雄大なライン川を見ていなければ、パリの金融街かと思ったことだろう。(I, 5-6)

メアリー・シェリーの『6 週間旅行記』においても、若者たちの夢に立ちはだかる壁として金銭社会に対し皮肉をもって触れる箇所がある。

> パリから持ってきた金はほぼ底をついたが、町の銀行から手数料をとられたものの 38 ポンドを入手し、ウーリ湖まで旅を続けることにした。そのロマンチックな地で小さな家を見つけ静かに平和に暮らしたいと思った。私たちのその夢は、必需品、つまり金の欠乏がなければ実現したはずだ。結局、イギリスに帰らなくてはならなかったが。(45)

またシェリーの「モンブラン」(“Mont Blanc”) が旅行記であるメアリー・シェリーの『6 週間旅行記』に発表されたことは、ウィリアムズの “Hymn among the Alps” が『スイスの旅』の中に挿入されているのと似た形になっている。両者の間にはいくつかの類似点がある。シェリーも関心を持っていたビュフォン (Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon, 1707-1788) やソシュール (Horace Bénédict de Saussure, 1740-1799) らの地質学者への言及が含まれ、氷河の形成や地質学についてシェリーと共通の関心をもっていたことがわかる。また、植物学者であり詩人のエラズマス・ダーウィンを愛読していたことでも共通する。“Complaint of the Goddess of the Glaciers to Dr. Darwin” は、ウィリアムズがこの本の脚注のなかで発表したユーモラスな詩である。氷河の女王が語り手にこ

う命じる。

Go, tell him, stranger, had his muse explor'd
My realms, new marvels had enchain'd her eye;
Go, tell him, in my sunless fanes are stor'd
Treasures no vulgar glance shall e'er descry.　(II, 294n)

訪問者よ、彼のもとに行き告げるのだ、
もし彼の詩神が我が王国を探訪したならば、
新しい驚きが詩神の目をくぎ付けにしたはずだ。
行って告げるのだ。わが日の光の届かぬ神殿には、
無知な目にはわからない宝がしまわれていると。

植物学者のダーウィンは氷河について自分で実際に観察せずに氷の塊を植物にとっての敵とみなしているが、もし自分の目で氷河をよく見てみれば、そこには自然の驚異について多くの発見ができるであろうということをウィリアムズは伝えようとしている。この詩の中にも、「氷河の女神」の言葉として、この厳しい自然の恐ろしさを描くところは、ウィリアムズの特徴として注目したい。

Stay thy rash steps! my potent hand impels
The rushing avalanche to gulphs below!
I can transfix thee, numb'd, in icy cells,
Or shroud thee in unfathom'd folds of snow!　(II, 294n)

軽々しく足を踏み入れるな。私の万能の手は
押し寄せる雪崩を下の谷間へと駆り立て
お前を氷の隙間に閉じ込め、動けなくさせて
底知れぬ雪のなかに閉じ込めてしまうぞ。

ウィリアムズのアルプス氷河への関心は、まだフランスへ旅立つ前に書いた“An Epistle To Dr. Moore, Author of A View of Society and Manners in France, Switzerland, and Germany”（『詩集』巻２，1786）にもみられる。ウィリアムズの文芸の重要な導き手であった医師であり小説や旅行記の著者のジョン・モア(John Moore, 1729-1802)の旅行記に強い印象を受け、彼の描くヨーロッパの風景や人々について感想を綴っている。その中にアルプスの氷河についての描写がある。

How wrapt in snows and icy showers,
Eternal winter, horrid lowers

Upon the mountain's awful brow,
While purple summer blooms below;
How icy structures rear their forms
Pale products of ten thousand storms;
Where the full sun-beam powerless falls
On crystal arches, columns, walls . . . (*Poems*, II, 10-11)

山々のはるかな頂に永遠に続く厳冬が
下り、雪と氷で包み込む
麓では紫の花々が咲き誇るのに。
氷の建造物が高々とそびえる
1 万回もの吹雪がつくったものだ。
そこでは真昼の日の光が力なく届く
水晶のアーチや柱や氷壁に。

ここには何万年もの間に降り積もった雪が氷河を生成するという正確な知識や高山の気候についての科学的、客観的な描写が見られる。このような事物に対する態度は、ウィリアムズの歴史記述にも共通する特徴である。

アルビー（Nahoko Miyamoto Alvey）は、ウィリアムズの“Hymn Written among the Alps”を創造主の存在とともにアルプスの山々をたたえる点において、シェリーの無神論的観点とは一線を画すものとしている (89)。ウィリアムズの詩は、「讃美歌」として書かれているため、冒頭と結尾のそれぞれ 4 行のスタンザにおいて、創造神を讃えることばに飾られている。そのため、詩全体がその目的のために書かれていると思われるかもしれない。しかし、コールリッジの“Hymn before Sunrise”とは異なって、冒頭と結尾以外には創造神の存在に触れる言葉はなく、アルプスの生き物を寄せ付けない厳しい自然の描写自体についてみると、神的存在の有無を切り離して、自然をありのままに見つめる視点が特徴的であり、この点においてシェリーの「モンブラン」と共通するものがある。ウィリアムズの鷲の描写では、「孤独」(“alone”)という語が人間からも神からも独立して高みに休む様子を表す。また、高く羽ばたき、その飛翔は「彼自身の住処へ」(“haunts still more his own”)と向かう。ここで“sullen”という語は「ゆったりと」というニュアンスと同時に「他を寄せ付けない」様子を表し、自然の事物が人間とは別の世界の存在であることを示唆する。

Where on some bold, stupendous height,
The Eagle sits alone;
Or soaring wings his sullen flight
To haunts still more his own: (“Hymn among the Alps,” 9-12)

険しい、はるかかなたの高みに
鷲はただ一羽とまる。
また上へとゆったりと羽ばたき
もっと自分にふさわしい住処へと向かう。

これとよく似た詩句がシェリーの「モンブラン」にもみられる。人には縁のない嵐のみが住む荒野だが、時折、鷲が漁師の骨を運んでくる。またそこへ狼も鷲を追ってゆく。そこでは人間は生きられず、骨になっている。鷲や狼の住む自然の世界は人間界とはまったく別の次元の世界であることがわかる。

A desert peopled by the storms alone,
Save when the eagle brings some hunter's bone,
And the wolf tracks her there . . .　(Shelley, “Mont Blanc” 67-69)

雪嵐のみが住む全くの荒野
ときおり鷲が両氏の骨を持ってくる以外は、
そして狼がそこを探る。

またウィリアムズは、雄大な山岳の展望のかなたにごく細かな点として小さな羊の群れが見える風景を描く。わずかな生き物の姿に対して、山々はあまりに大きく、飲み込まれそうで不安にさせる。やっと山小屋が見えて、少し安心するが、それは人の「最後の住処」(The last abode)である。「最後」という言葉は標高が高くなるにしたがって、人家がなくなり最後に見られるものという意味と同時に、最近まで人が住んでいたが氷河や厳しい冬に耐えられず、見放された家という意味にもなる。

Where on the slope, with speckled dye
The pigmy herds I scan;
Or soothed, the scattered Chalets spy,
The last abode of man:　(“Alps,” 49-52)

斜面の上には、飛び散った染料のように
小人の羊の群れが見える。
あちらこちらに山小屋も見えて気が安らぐ。
しかしそれは人の最後の住処。

十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、ヨーロッパは寒冷期にあり、氷河は

成長を続け、樹木や草原を押し流そうとしていた。シェリーの「モンブラン」は、圧倒的な氷河の前に人家が跡形もなく消えゆく様子を描く。氷河がいともたやすく松の木や岩を飲み込み、それは人の暮らしも飲み込んでしまう。

The dwelling-place
Of insects, beasts, and birds, becomes its spoil;
Their food and their retreat for ever gone,
So much of life and joy is lost. The race
Of man flies far in dread; his work and dwelling
Vanish, like smoke before the tempest's stream,
And their place is not known. (“Mont Blanc” 114-120)

虫や獣や鳥の住処は
氷河の餌食になり、彼らの糧も逃げ場所も永遠に消える。
多くの命も喜びも失う。人間は恐れにかられ、
はるか先ににげる。その作ったものも住処も
消える。まるで嵐の流れが煙をかき消すように。
どこにそれがあったのか全く分からなくなる。

人間に対する自然の圧倒的な威力を描く点で、ウィリアムズとシェリーの詩には共通点がみられる。さらに個々の自然の事物の描写についてみると、両者には、たとえば嵐に耐える松の木についての共通の関心がある。

Where firm the dark unbending pines
The howling tempests mock: (“The Alps” 63-64)

黒い揺らぎない松の木が
吠える嵐をあざわらう

Thy giant brood of pines around thee clinging,
Children of elder time, in whose devotion
The chainless winds still come and ever came
To drink their odours, and their mighty swinging
To hear—an old and solemn harmony (“Mont Blanc” 20-24)

おまえ〔モンブラン〕の巨大な松の一群がお前にしがみつく
古の時代の末裔。それにつきしたがう自由な風が
つねに訪れ、そしてその香りを味わい、大いなるうねりを
聞くために訪れた。古の荘厳な和音。

一日の中での自然光のさまざまな条件により、山頂の雪の上を照らす光の色が変化するところを描こうとするところにも、ウィリアムズとシェリーの間には科学的観察者の視点において共通するものがある。

Where the rude cliff's steep column glows
With morning's tint of blue;
Or evening on the glacier throws
The rose's blushing hue:
Or where by twilight's softer light,
The mountain's shadow bends;
And sudden casts a partial night,
As black its form descends: (“The Alps” 18-25)

荒々しい崖の急峻な岸壁が
朝の青い光の中で輝くとき
また、夕刻に氷河の上に
バラの赤らむ色を投げるとき、
薄暮のやわらかな明かりによって
山の影が降りて
急に夜の闇を、真っ黒な形に
投げかけるとき。

In the calm darkness of the moonless nights,
In the lone glare of day, the snows descend
Upon that Mountain; none beholds them there,
Nor when the flakes burn in the sinking sun,
Or the star-beams dart through them. (“Mont Blanc” 130-134)

月明かりのない静かな暗闇の中、
真昼の孤独な輝きの中、雪は
山頂に降る。だれもそれを見る者はいない。
雪片が夕日の中に燃えるときも
星の光がそれを突き抜けるときも。

さらに、生き物の住めない世界を、だれも音を聞くことのない静寂な世界として表現する点においても、二つの詩には共通点がある。

Winds contend
Silently there, and heap the snow with breath
Rapid and strong, but silently! (“Mont Blanc” 134-136)

そこでは、風は互いにぶつかり合う
静かに。そして風は雪を急速に力強く
積み上げる、しかしそれは静かだ。

Where far along the desart air
Is heard no creature's call:
And undisturbing mortal ear
The avalanches fall: (“The Alps” 37-40)

荒野の空気の中には、はるかかなたまで
全く生き物の声はしない。
そして生きるものの耳に触れず
雪崩はとどろく。

望遠鏡ではるか遠くにおこる雪崩を見るとき、音は聞こえない。人間の世界と隔離した厳しい自然の世界は人間の知覚を超えた世界である。そのことを人間にとっての沈黙の世界として表そうとするところに、ウィリアムズとシェリーには自然について、人間の論理のおよばない独自の存在を認めようとする態度が共通にみられるのである。

ウィリアムズの『スイスの旅』の巻末には、付録として友人の政治家、地質学者のラモン・ド・カルボニエールがウィリアム・コックスの *Sketches of the natural, civil, and political state of Switzerland*（1779）をフランス語に翻訳した際に氷河についての研究者としての自身の注釈を“Observation du traduteur. Sur les glaciers et les glaciers”という文章にして挿入した（1781、書簡 23）。コックスはさらにこれを、自分の３巻本に増補した『スイス旅行記』(*Travels in Switzerland*) において、フランス語版翻訳者によるコメントとして英訳して掲載している（1789, 2: 139-163）。ヘレン・ウィリアムズもおそらくコックスの訳を知っていたと思われるが、『スイスへの旅』の巻末には、付録として彼女自身によるカルボニエールの翻訳を載せている。つまりカルボニエールの「解説」（“Observations”）には、ウィリアムズとコックスによる二つの英訳が存在する。ワーズワースやバイロンもカルボニエールの文章を読み、自分らの文章で言及しているが、これは、ロマン派にとって重要なテクストである（Duffy, ed. 27-28）。コックスとウィリアムズのそれぞれの訳を比較することは、ロマン派の想像力論の形成を理解するうえで興味深い。人知を超えて人間とは独立して存在する自然に対する態度は、シェリーの「モンブラン」に通じるものがある。

ウィリアムズの翻訳について注目すべきは、カルボニエールの想像力につい

ての思想に注目し、人間の精神における「理性」（Reason）と「想像力」（Imagination）、それぞれの役割について、ワーズワースやシェリーと同じ関心を持って注意深く訳している点である。これに対し、コックスの訳には想像力の問題への関心は見られない。アルプスの山々を形成する膨大な時間について向き合うとき、人間の理性は、これをとらえきれず混乱をきたすとカルボニエールは述べる。

[de Carbonnièrres:]
En vain alor la raison voudroit compter des années. La solidité de ces masses énormes opposée à l'accumulation de leur ruines, l'épouvante et confound son calcul. L'imagination s'empare de ce que la raison abandonne, et dans cette lonue succession de périodes, elle croit entrevoir une image de l'éternité qu'elle accueille avec une terreur religieuse.

[Google Translation:]
In vain then reason would like to count years. The solidity of these enormous masses opposed to the accumulation of their ruins, terrifies and confounds his calculation. The imagination takes hold of what reason gives up, and in this long succession of periods, it thinks it catches a glimpse of an image of eternity which it welcomes with religious terror.

[Coxe:]
In vain reason would attempt then to count the years. The solidity of these enormous masses, compared to the accumulation of ruins by which they are surrounded, frightens, and distracts it. Imagination taking up, what reason was compelled to abandon, conceives in this long succession of periods an image of eternity.

[Williams:]
In vain would reason strive to count by years. The solidity of these enormous masses, opposed to the accumulation of their ruins, startles and confounds all its calculations. Imagination seizes the reins which Reason drops, and in that long succession of periods, catches a glimpse of the image of eternity, which she hails with religious terror.

カルボニエールの原文はこの巨大な山脈が形成されるまでの膨大な年月を数えようとするとき、数値化できないその巨大な存在自体に驚き、「計算」を混乱させるとなっているのに対し、コックスの文章“distracts it”の“it”は計算ではなく「理性」を指す、つまり理性の役割は分析的な計算であるのだが、コックスの訳ではそれを見落とし、膨大な時間や空間、存在自体に対しては理性が司る分析的機能は無力であるという意味が表せない。コックスの訳では理性がなぜ「怯える」のかがわからないのである。それに対し、ウィリアムズは理性と想像力のそれぞれの役割を正確にとらえているため、理性の役割を“calculations”と訳している。また「理性が手綱を放したところでそれを想像力が「喜んで」受け取り（*qu'elle accueille*）のところコックスは省略しているのも、コックスがカルボニエールにおける理性と想像力のそれぞれの役割を理解していない証拠である。コックスにおいて最も特徴的なのは以下の部分である。

> Our vastest ideas, our noblest sentiments proceed from the delusions of fancy; we would be incapable of conceiving a sublime idea, or performing a brilliant action, did it not continually enlarge and aggrandize these sublunary scenes; transform the finite into infinite, time into eternity, and fading laurels into immortal crowns.
> （Coxe II, 161）

> 我々の最も壮大な概念は、われわれの最も気高い感情は、空想の幻惑から生じる。われわれは、もし、その幻惑が絶えずこれらの地上の景色を拡張して、雄弁を無限に変え、時を永遠に、色褪せた月桂冠を永遠なる王冠に変えることがなければ、崇高なる概念も、まばゆき行為をなすこともできないだろう。

コックスの訳では、われわれの最も崇高な感情は「空想の幻惑」から生じるとなってしまう。ウィリアムズは“our most extended and noble sentiments have their origin in the wanderings of the imagination”と訳す。すなわち、「崇高な感情は、想像力が様々な方向に導くところに由来している」としている。カルボニエールの原文は“*les seductions de l'imagination*”「想像力の誘惑」となっているので、ウィリアムズよりも想像力について警戒する意味が含まれているが、これに続き、「しかしこうした幻想はわれわれの崇高な概念のもとなのであるからこれを許そうではないか」と続けている。ウィリアムズはこの原文をほぼ忠実に訳出しているが、コックスは省略している。コックスにおいては、崇高な感情はすべて幻惑に由来することになってしまうのに対し、ウィリアムズにお

いては、想像力は、たとえそれが映し出すものが幻であっても人間の崇高な概念のもとになっているのだから、理性と同様に重要であるというロマン派詩人たちの理論、すなわち、理性（reason）と幻想（vision）ないし想像力（imagination）との関係について、ロマン派と共通の理解がある。ウィリアムズはこの視点に立ってカルボニエールを理解しているのである。想像力こそ、無限や永遠という概念を与えるもので、人間の精神にとって決定的な重要性をもつという考えをカルボニエールに認めているのである。

想像力論はワーズワースとコールリッジが独自に考えたものではない。キーアン・ダフィ（Cian Duffy）は、カルボニエールの文章は、ルソーの『新エロイーズ』におけるアルプス高山の景観が想像力に及ぼす影響についての記述に負うところが多いとしている（27–28）。しかし、想像力論については、単に自然を鏡のように映し出すのではなく、ランプの明かりのように、心の中から真実を投影するものだという考えは、M・H エイブラムズが論じるように、十七世紀ケンブリッジの新プラトン主義者らに追うところが大きい。イギリスのロマン派詩人たちすべてにとって、詩の役割についての議論の中心的な問題である(57-69)。おそらくはロンギノスや新プラントン派、ルソーやドイツ観念論の影響を受けながら、ワーズワースらに先立ってカルボニエールとウィリアムズには、想像力の重要性についての着目していたのである。

ここでさらに注目したいのは「理性」と「想像力」の対照的な役割である。これはシェリーの『詩の擁護』の主題にかかわる問題である。そこにおいてシェリーは、理性（reason）と想像力（imagination）の定義を議論の出発点にしており、精神におけるこの二つの役割が主題となっている。理性は分析的な思考の働き、想像力はさまざまな概念を自由に融合することによって、理性では把握できない世界の複雑さを理解する精神活動である。カルボニエールの論じるように、単に時間を数字に置き換えては、目の前にそびえるアルプスの自然についての理解はできない。そこで永遠性、崇高性、あるいは自然と人間存在についての理解は想像力にたよるほかはないのである。

「モンブラン」は、シェリーの詩についての評論において、もっとも多くの議論がなされている詩の一つである。その議論の中心となっているのが詩の結末の問いである。ここまで見てきたウィリアムズとの共通項を踏まえることは、問題のこの詩句の解釈に役立つ。

And what would thou and earth, and stars, and sea
If to the human mind's imaginings
Silence and solitude were vacancy? (“Mont Blanc” 142-144)

お前〔モンブラン〕、地球、星、そして海はどうなるだろう、
もし人間の心の概念にとって
沈黙と孤高とが空白であったなら。

コールリッジは、The Morning Post 紙上に彼の“Hymn before Sun-rise”発表した際に冒頭にこう付した。“Who would be, who could be an Atheist in this valley of wonders?” 多くの批評家は「モンブラン」は、コールリッジの詩に対するシェリーの返答と考えている。特に論争の焦点になっているのが、詩の結末における“vacancy”についての解釈である。これはコールリッジの詩の展開における鍵となっている前半部分の以下の詩行に向けられたものと考えられる。

O dread and silent Mount! I gazed upon thee,
Till thou, still present to the bodily sense,
Didst vanish from my thought: entranced in prayer
I worshipped the Invisible alone. (“Hymn before Sun-rise” 13-16)

恐ろしき沈黙の山よ。われはおまえを眺め、
すると汝はこの肉体の間隔にはまだ見えるのに
わが思想からは消えたのだ。祈りに夢中となり、
ただ見えぬ神のみを崇めた。

シェリーの“silence,” “solitude,” “vacancy”と関係するのがコールリッジの詩の傍線部分、“silent,” “vanish,” “the Invisible”である。コールリッジの詩において、肉体的な目には、そこに映っているモンブランは心における概念から消える（“vanish”）。コールリッジの“thought”はシェリーの“imaginings”と同義であるが、山はシェリーのモンブランと同じく“silent”である。この山が心象から突然消えることで目に見えなくなる（“invisible”）。これは、人の目に触れないという意味でシェリーの“solitude”に対応すると言えるだろう。さらに、目に見えないということからメトニミーとして神を表す“the Invisible”をそこに当てはめることで、コールリッジは崇拝の対象としている。シェリーが“vacancy”という語で主張するのは、目に見えないものを「神」と呼ぶのではなく、「空白」として認めようということである。目に見えないものを不可知とするのではなく、善なる「神」として崇拝する信仰が人々の苦難を正当化す

る「虚偽と悲しみの巨大な規」(“Large codes of fraud and woe”)につながっていることをシェリーは見据えているのである。ここで、“Silence and solitude”または“invisible”を“the Invisible” (神)ではなく、単に“vacancy”すなわち空を空としてとらえたらならば、モンブランや自然はより真実に近いものとして受け止められるだろうというのがシェリーのコールリッジに対する返答であった。

1980 年代までの評論においては、もし人間の想像するものは空白（vacancy）であったら、モンブランも海も地球も意味を持たないだろうという、人間の想像力が自然に対して優越していることを主張するための修辞的疑問文であるする解釈が多かった。しかしこれに対し、ホーグル（Gerrold Hogle）は異を唱え、モンブランや自然は人間の精神とは本質的に異質のものとして、「沈黙」と「孤高」を人間精神が自由に意味づけできるものという読みを批判している (85-86)。ジョンズホプキンズ版第 3 巻でこの詩を編集したフレイスタットとクルックは、絶えず議論の的となっている詩の結尾の問いについての注において、“On Life”中の以下の言葉を引用して、“vacancy”に積極的な意味付けが与えられていることを指摘している。「哲学は誤謬と誤謬の原因をなくすためのものだ。哲学とは改革者が政治的倫理的な問題に対し、空白として残すべき問題を空白のまま残すものだ」“[Philosophy] destroys error, and the roots of error. It leaves, what is too often the duty of the reformer in political and ethical questions to leave, a vacancy” (Shelley 522)。

「モン・ブラン」が発表された『6 週間旅行記』において、ほかに唯一“vacancy”の語が用いられるのが、「書簡 III」において、ローザンヌのギボンの家を訪ねた時の記述である。同行の仲間が旅の記念にアカシアの葉を持ち帰った際、シェリーは、ギボンよりはるかに大事なルソーのことで心がいっぱいで、この世のものに心を傾ける余裕はないから、それをしなかった」（“the contemplation of whose [Rousseau’s] imperishable creation had left no vacancy in my heart for mortal things”）と書き送っている（138）。つまり、“vacancy”とは、意味の「空疎」ではなく、心の中に残しておくべき空間、何かを受け入れるための心のスペースと考えられる。これを念頭に「モンブラン」の結尾を言い換えると「もし、沈黙と孤高とを空白のまま受け止められたら、山や地球や海は、どのようなものとなるであろう」ということになる。

近年の批評においては、こうした視点による解釈が多くなっている。ヒット（Hitt）は、「山をテクストとしては書かず、シェリーは空白のまま、そして自然をその空白を通して、ただ固く動かないものとして考えるよう導いている」と論じている。同時に「人間の思想は……重要な意味において、物質的な自然

に従属しており、山は結局のところ精神とは独立している」とも述べる（158）。エコノミデスも、「結末の問いは、修辞的疑問文ではなく、答えのない問いへ答えることを求めている。我々が〈自然〉と呼ぶ領域の一部は社会言語的構造をこえるものであることを認めているからである」と述べているが、これはやはりシェリーの哲学が答えのない問いを「空白」として残すべきと論じることに通じる（108）。エドワード・ダフィはさらに、「『モンブラン』の注目すべき斬新さは、シェリーが知を求めない学術と科学があると知らしめたことで、それは、我々の知の限界を定めようという思考法であり、人間の知の限界を超えようするしばしば虚偽で不徹底な主張を暴くものなのである」と結論づけている（25）。

シェリーがモンブランから学んだように。先入観によって目を閉ざすのではなく、目の前にあるものを空白は空白のまま受け入れるという姿勢においてウィリアムズは、シェリーと共通している。シェリーは『六週間旅行記』の序文において、巻末の詩「モンブラン」についてこう紹介している。

> It was composed under the immediate impression of the deep and powerful feelings excited by the objects which it attempts to describe: and as an undisciplined Overflowing of the soul, rests its claim to approbation on an attempt to imitate the untamable wildness and inaccessible solemnity from which those feelings sprang. (*History of a Six Weeks' Tour*, vi)

> それは、描こうとする対象によってかき立てられた深く強烈な感情による直接的な印象のもとに書かれたものである。魂の奔放な吐露としての詩なので、その称賛すべき点はと言えば、そうした感情の源泉である人とは無縁の野生と、近づきようのない荘厳さを再現しようとした試み以外にはないのである。

シェリーの言葉はウィリアムズが訳すカルボニエールのアルプスの自然観に共鳴するものがある。シェリーの「強烈な感情」とは、アルプスの厳しい風景が人間の営みとは全く独立したものであるという認識に基づくがカルボニエールの文章も、そのことを指摘している。

> The silence of these deserts, where nothing breathes, or moves, beyond the tumult of the habitable world; the view of these profound abysses; of valleys which those immoveable cliffs have beheld alternately desert and cultivated, peopled to-day, to-morrow desolated, the asylum of so many alternately happy and miserable

> mortals, the theatre of so many changes; every thing concurs to make our meditations more profound; to give them that melancholy hue, that sublime character. . . . (350-51)
>
> これらの荒野の沈黙、人の住む下界の喧騒の外、そこでは何も息をせず、動かない。この深遠な断崖の風景、これら動かしようのない絶壁が、長い年月の間、人が住んでは、打ち捨てられ、幸福と苦難とを繰り返す膨大な年月と無数の変化の劇場を見下ろしている。これらすべてのものは、我々の省察をより深いものにし、あの悲しい色、あの崇高な性格を与えている……

引用冒頭の“silence”という言葉がカルボニエールとシェリーとの親近性を象徴している。両者とも、生物界の標高を超えた高山の自然について、人間の世界の変化とは全く独立したものだという点を強調する。自然の変化や災害によって人家は打ち捨てられ、また気候が許せば人は戻ってくる。しかしこうした人間生活の変化は高山の自然にはあずかり知らないものであることが、それに気づく者に深い印象を残すのである。

これまで見てきたウィリアムズとシェリーとの関係についてみると、詩人同士の影響関係というよりは、カルボニエールを含めた十八世紀末の自然に対する見方が、世代を超えてシェリーに受け継がれていると考えるほうが、十八世紀末思想を評価する上でより意義があるであろう。コールリッジは同じ十八世紀の科学思想、進歩思想の中で育ちながらも 1790 年代の政治的抑圧の時代の中で、批判を避けるため、セルウォールら、危険思想の持ち主として悪名高き人々との関係を断ち、当時の敬虔思想に受け入れられやすい形而上学的な思想と言語によって詩人、作家として生きる道を選んだ。ケネス・ジョンストンは、ウィリアムズやコールリッジを含め、フランス革命時に、政治的変革を主張したために、1790 年代以降、活躍の場を奪われ、業績を否定され、あるいは転向を余儀なくされた数多くの知識人、作家の例を挙げている。ジェームズ・マッキントッシュ(James Mackintosh, 1765-1832)、ジョン・セルウォール（John Thelwall, 1764-1834）、ジョセフ・プリーストリー（1733-1804）、ウィリアム・ゴドウィン（1756-1836）ら、20 名以上の例が論じられている。ゴドウィンはシェリーの尊敬する哲学者であり、ワーズワースを始め当時の多くの知識人に影響を与えたが、1790 年代末には、自分の本名を隠し、児童文学者として生計を立てなくてはならない状況に追い込まれた。シェリーの知的探求心は、フランスの啓蒙思想家ら、1790 年代の抑圧の時代以前の著作に絶えず向かっていた。ウィリアムズはフランス革命についての同時代の現地からの記録を書き残した以外、思想

的な影響力があるわけではないが、本論で見るように、シェリーとは近い自然観、歴史観を持っていた。シェリーは自身の知的探求において、1790 年代以降、ウィリアム・ピットの政権下の政治的抑圧の状況によって自発的、強制的な検閲を経た書物ではなく、それ以前のより自由な思想のもとに書かれた著作を探ることで、同時代の知的状況から自由な思考を身に着けようとしていたのである。ウィリアムズは十八世紀末の自由な思想的環境に育まれ、フランス革命の展開、ロベスピエールの恐怖政治等、すべて体験しながらも、革命の理想を放棄しなかった。そうした前世代の知識人としてのウィリアムズはシェリーにとっても尊敬を持って受けとめられていたに違いない。

注

本稿はイギリス・ロマン派学会第 47 回全国大会にて行った口頭発表「シェリーの “Mont Blanc” とヘレン・マライア・ウィリアムズ」(2021 年 10 月 17 日)の内容をもとに加筆、修正を行ったものです。本研究には JSPS 科研費による助成を受けています (課題番号 19K00449「メディアがつくる感受性の文学とイギリス十八世紀末女性詩人」)。

引用文献

Abrams, M. H. *The Mirror and the Lamp: Romantic Theory and the Critical Tradition*. OUP, 1953.

Alvey, Nahoko Miyamoto. *Strange Truths in Undiscovered Lands: Shelley's Poetic Development and Romantic Geography*. U of Toronto P, 2009.

Coxe, William. T*ravels in Switzerland: In a Series of Letters to William Melmoth from William Coxe*. Vol. 2. London : T. Cadell, 1789. Basil: Thomas Decker, 1802. Google Books.

De Carbonnières, Louis Ramond, tr. *Lettres de M. william Coxe à M. W. Melmoth, sur l'état politique, civil et naturel de la Suisse*. Traduites de l'Anglois, et augmentées des observations faites dans le même pays par le traducteur. Paris: Belin, 1781. Une Oeuvre du domaine public. Kindle Edition.

Duffy, Cian, ed. *Cultures of the Sublime: Selected Readings, 1750-1830*. Red Globe Press, 2011.

Duffy, Edward T. *The Constitution of Shelley's Poetry: The Argument of Language in Prometheus Unbound*. Anthem Press, 2011.

Economides, Louise. "'Mont Blanc' and the Sublimity of Materiality." *Cultural Critique* 61 (2005): 87-114.

Gravil, Richard. *Wordsworth and Helen Maria Williams; or, the Perils of Sensibility*. Humanities-Ebooks, 2010. Kindle.

Hitt, Christopher. "Shelley's Unwriting of Mont Blanc." *Texas Studies in Literature and Language* 47 (2005): 139-166.

Hogle, Jerrold. *Shelley's Process: Radical Transference and the Development of His Major Works*. OUP, 1988.

Johnston, Kenneth R. *Unusual Suspects: Pitt's Reign of Alarm and the Lost Generation of the 1790s*. Oxford UP, 2013.

Jones, Chris. *Radical Sensibility: Literature and Ideas in the 1790s*. Routledge, 1993.

Kennedy, Deborah. *Helen Maria Williams and the Age of Revolution*. Bucknell UP, 2002.

Shelley, Mary Wolstonecraft. *History of a Six Weeks' Tour*. London: Hookham and Ollier, 1817.

------. *The Journals of Mary Shelley, 1814-1844*. Ed. Paula R. Feldman and Diana Scott-Kilvert. Johns Hopkins UP, 1995.

Shelley, Percy Bysshe. *The Complete Poetry of Percy Bysshe Shelley,* Volume 3. Ed. Donald H. Reiman, Neil Fraistat, and Nora Crook. Johns Hopkins UP, 2012.

Williams, Helen Maria. *A tour in Switzerland; or, a view of the present state of the governments and manners of those cantons: with comparative sketches of the present state of Paris*. 2 vols. London: G. G. and J. Robinson, 1798. Google Books.

------. *Poems in Two Volumes*. London: Thomas Cadell, 1786. Internet Archive.